

中学校長会会長賞

堺市立 三原台中学校 二年

小 谷 一 水

「つながり」と「自分らしさ」

私は非行や犯罪者と呼ばれる人について、正直よく分かっていない。その人たちとそう呼ばれることをしてしまったことを受けた人それぞれの気持ちや考え、また社会に及ぼす影響をよく理解していない。ただ、いろんな人と出会っている今があるのは分かる。自分のつながりを意識したエピソードとともに、社会のあり方を考えてみた。

私は陸上部に所属している。私は強くなりたいという思いで懸命に取り組んでいる。それに対して他の陸上部の子たちは、友達と楽しくやっていきたいような気持ちであった。そして、私とその子たちとのすれ違いが起きた。私は落ち着いて、言葉で対処しようとしたが、何か話すと言い返してくるの繰り返しだった。私は落ち着いて対応してきたつもりだったが、とうとう気持ちが溢れ出てしまった。もう限界だと思った。部活中に私一人逃げ出した。悲しかった。怖かった。気づくと涙でいっぱいだった。

その姿を見た他の部活の子が、私の所に駆けつけてくれた。その子はいつも一緒に授業を受けたり遊んだり話をする同じクラス

の子だ。

「大丈夫？何があったん？」

と話しかけてくれた。その子は部活中にも関わらず、同じ部活の子に遅れるとだけ伝えて私のそばに来てくれた。私はその時、部活を抜け出した自分への驚きと恐怖の中にいてそのことについて何も話し出せずにいた。しかしその子はそんな私を見て私が落ち着いて話せるようになるのを待ってくれた。そのおかげで私はその子に、自分の気持ちを話すことができた。話が終わると最後に、「いつでも相談してな。」

と言ってくれた。私の担任の先生も泣きじゃくっていた私を見て、優しく包み込んでくれた。気持ちを聴いてもらったことで、私の心の中にあつた、焦り、心配、怒り、寂しさが私から離れていくように感じた。陸上部の先生にも話せたことで、私はもう一度すれ違った子たちと話してみようと思えた。そのまま先生に間に入ってもらい、それぞれ自分の考えや気持ちを話し合うことができた。先生もそのたくさんの思いを大切にする陸上部を目指してく

れた。今年に入り新しい陸上部の先生になったが、その空気を大切にしようとしてくれている。

熊谷晋一郎さんの「自立とは、ひとりで生きることではない」という本に「自立とは依存先を増やしていくこと」と書いてあった。私ははじめ依存先を増やすとは自立の反対なのではと思った。でも陸上でのはずれ違いを考えると私がもう一度、陸上部のみんなと話してみようと思えるきっかけをくれた人たちが私にとっての依存先であると気づかされた。

私は、周りの真剣に気持ちを捉えようとしてくれる人が大切であると感じた。陸上部でトラブルになった関係を重ねると、相手側の立場になった人にとっても、私側の立場になった人にとっても、その周りにいる立場になった人にとっても、気持ちを受け止める大切にしてもらえることが伝わってくる関係を築いた上で、それぞれの選んだ「強くなりたい」や「楽しくやりたい」や「困っている人に寄り添う」や「寄り添おうとしている人のサポートをする」や「目の前の人たちがのびのびできる雰囲気をつくる」ことができていると感じることができるとつながりである。私はその依存先を増やしていけるように、私自身が国籍、先生か生徒か、何年生か、性別、障害があると感じさせてしまっている人か、勉強ができるかできないか、お金を持っているか持っていないか、顔がどうか、スタイルがどうか、非行と言われる人であるか

ないか、法律を守ることが難しかった過去があるかなど関係なく、出会った人の依存先になれたらいいと思う。誰にとっても、どんな人にとっても、そのつながりを一人ひとりがそのなりに持つことができる中で、それぞれ自分自身の気持ちを大切にできていると感じられる社会、世界であるかを基に今を見つめて、私の今日、したいことやできることをしていく。

